インのものもあったらいいだろうなと思って、ミニ骨壷を置いているんですよ。実際、〝お墓は要らないから手元供養品がほしい〟という方はほとんどいません。たいがい永代供養墓を選ばれて、それでもちょっと手元に置いておきたいなあという方が求めていかれます」

平安時代の和泉式部ゆかりのお寺、京都市中京区の真言宗泉涌寺派誠心院では境内に永代供養墓を建立している。荒木本恵住職（六十二歳）はこう話す。

「博國屋（前出）の紹介で手元供養を買った方がうちの永代供養墓を求められることがあります。でも〝ようやくお骨が納められた〟って安心されていました」

興味深い調査がある。上の表は東洋大学ライフデザイン学部の井上治代教授が博國屋の手元供養品を購入した、約三百人にアンケートをとったものだ（調査名「家屋内死者祭祀の変化に関する意識調査」、平成十八年）。

質問の「手元供養を選んだ理由」について上位三位が、①故人の一部である遺骨は仏壇や位牌より身近に感じられる、②そばに置いてあげたかった、③持ち歩くことができ、いつも一緒にいる感じがいい、というもの。しかし、お墓や仏壇がないのかといえばそうではない。仏壇や位牌の有無については65％が「どちらもある」と答えている。

また「手元供養への納骨分以外の遺骨はどうされましたか」という問いには、最多が「家墓に納骨」で、次いで納骨堂や合祀墓に納めたと回答。お墓が要らないというものでは、ないわけだ。

表❷ 手元供養を選んだ理由は？

表❷❸とも出典『家屋内死者祭祀の変化に関する意識調査』（東洋大学ライフデザイン学部・井上治代教授、調査対象約300人）

1	故人の一部である遺骨は仏壇や位牌より身近に感じられる	59人
2	そばに置いてあげたかった	55人
3	持ち歩くことができ、いつも一緒にいる感じがいい	29人
4	次男・三男・娘でも祭祀（供養）できる	12人
4	墓が遠いので身近で供養したかった	12人
5	散骨したので何か形を残したかった	11人

表❸ 手元供養以外の遺骨はどうしたか

1	家墓に納骨	54人
2	今も自宅にある	22人
3	納骨堂に納骨	11人
4	合祀墓に納骨	9人
5	海への散骨	8人

手元供養のニーズの背景にある声

前出、山崎会長は手元供養品の購入者と話し、こう感じるようになったという。

「手元供養はグリーフケアの機能が大きいのではないでしょうか。とくに逆縁にあった方など、手元から遺骨を離しがたいでしょう。一部、手元に残しておくことで、次第に心が落ち着き、納骨にも納得できたという声を聞きます。分骨の風習そのものは昔から関西にもありました。でも、今のように受け入れられるようになったのは社会の変化も大きいかと思います。昔なら地域のコミュニティがしっかりしていて、身内を亡くした家族に、近所の人が気遣ってくれた。ところが、都市部だと今や付き合いも薄く、核家族も増えている。すると悲しみを気遣ってくれる人が誰もおらず、内面の立ち直りがなかなかできない。年をとって伴侶を亡くした方の孤独は深いです。立ち直りに手助けしてくれる人として僧侶が求められるはずですが、お寺と付き合いがなければそうもならない。人とのつながりから生まれるグリーフケアの代替として、手元供養を求める方が多いように感じます」

浄土宗西寿寺・村井定心住職

供養は「要らない」のではなく、「求められている」がゆえの現象なのだというのである。

「なんにしても僧侶のつとめは…」

最後になったが、自ら手元供養の地蔵も作って試行錯誤しながら遺族とかかわっている住職をご紹介しよう。

京都市右京区にある、浄土宗西寿寺の村井定心住職（五十五歳）だ。村井住職は境内で樹木葬、お寺でアロマセラピーなど様々な活動を行っているが、最近とくに力を入れているのがグリーフケアだ。平成二十一年にはNPO法人「自分で考えるラストセレモニーの会」も立ち上げた。そのなかで生まれたのが布製の手作りの「花地蔵」だ（上の写真）。なかに布に包んだ遺骨を入れる。

きっかけを村井住職はこう話す。

「うちは樹木葬も行っているので、ひょっとしたら遺族が手元供養をしたいかなあと思ったのが始まりです。市販のものは後始末を考えていないような素材も多いし、値段も高いでしょう。お寺で作ったら喜ばれるかなと思ったんです」

しかし、あまり需要はないそうだ。

「今までほしいといわれた方は数人です。〝下手に持って帰ったら、祀るの大変ですがな〟といって敬遠される方のほうが多いですよ」と笑う。

が、村井住職は、僧侶にできることを、こんなふうに話す。

「ある葬儀屋さんから〝お金がない人なんだけど〟といわれて一万円でご供養したことがありました。お経をあげると、喪主の男性が大泣きして、こういわはるんです。〝お金がないので、葬儀もしなかった。でも四十九日まで、いっぺんもお経が親にあげられないのは辛くて仕方なかった。今日ようやく庵主さんのお経で救われました〟と。私はこの言葉を聞いたとき、本当に嬉しかった。お坊さんができることは、愛する人を亡くした人にどれだけ手を差し伸べられるかということだと思います。私はその過程を悲しみの質がまろやかになっていくと表現しています。葬儀や供養を通じて、じかにかかわれるのは、やっぱり僧侶しかいない。グリーフケアをさしていただくのが、僧侶のつとめだと思います」

手元供養品を求める声の裏に耳を傾けたいという話である。